

どうなる東京どうなる日本

(Part 1) 小池百合子都知事三選の裏側

東京都知事選挙は、予想通り、小池百合子女史の圧勝三選という結果に終わりましたね。しかし、選挙圧勝後の小池女史の記者会見における「改めて、“東京大改革”をバージョンアップしていきたいと思いません。」という談話はまったく予想外のものでしたねえ私には。改めて調べてみますと確かに、小池知事は立候補決定後の記者会見で、“東京大改革 3.0”を都知事戦の公約に入れて打ち出していたんですねえ。但し、記者会見とはいうものの、発表されたのは都庁内の一室からで、現場には記者の姿が見えずオンライン参加の形でしたから、都民には行ききわたらなかつたと思えるのですが、ご本人としては「三選を果たしえたのは私がとり続けてきた“改革”路線を都民が理解して支持してくれたお陰だ」と思い込みたかつたのでしょうかね。

小池女史は、それこそ女史呼ばわりが似つかわしくないほど、優しい笑顔と語り口で“人気”のニュースキャスターをされていましたね。そして多分、政治家へのインタビューを何人が経験しているうちに「これなら私でも政治家が務まる」と思って立候補して参議院議員になったのでしょうか。しかし、キャスター時代に培った表情のつくり方や滑舌の良い話し方、それに、お洒落な衣装の着こなし等々のスキルによって身に着けた“人気”が、今度は内閣の人気取り施策に用いられるところとなって、環境大臣次いで防衛大臣に起用されて、あっという間に「女性タレント出身の政治家で一番の出世頭」と呼ばれる程になりましたね。

しかし、小池百合子さんの場合は小泉純一郎元首相と親しくしていたことが、ちよいと違うところだったんですねえ。「郵政の民営化が改革の本丸」などと訳の分からないことを言っていた小泉純一郎元首相だけに、その“改革”の意味するところは曖昧模糊だったのですが、「“人気”だけじゃなくて政治家としてカイカクの姿勢を取り続けていかなくちゃ」と思いこんだところが、小池百合子さんの、数いる単なる大臣経験政治家諸氏と違うところだったんでしょうね。そして実際に「私は都政をカイカクするんだ」という意気込みを示し続けて東京都知事選挙に出馬してきたんだったようですね。

しかしまた、都知事になりたての時には、進行中であった築地市場の豊洲への移転という“改革っぽい”動きに掉さすような動きをしていましたね。豊洲の土壌や水質に関する問題解決策が“改革”案に盛り込まれていなかったために追加出資が必要になったのを見て、小池百合子さんは“改革”計画原案作成元であった前任知事の石原慎太郎氏に質問状を送ったりして大騒ぎしていました。結局は、『築地は守る。豊洲は生かす。』という落としどころをつけて小池百合子調で“改革”を成し遂げたような形を作りましたね。こんな経験をしたのですから、「従来の制度などを改めることを要する“改革”なんて私にはできない」とあきらめたかと思いきや、依然として“小池百合子流カイカク”路線を走り続けてきたんですね。

そんな良き知事たろうとする努力を小池百合子女史がされていたことには全く気が付きませんでした。元都庁の高官が定年退職後に発行された図書の中に以下のような文節が含まれていたのにもビックリしました。

「ゆりこのゆりもどし」と市場当局が呼び習わした「一度決まったことを平気で揺り戻そうとする」言動パターンは、「何かにつけてのあやふやな態度(決して本心を見せず、取り巻きの意見に左右され、その場その場の有利不利だけで判断する態度)」と相まって、迷走の度合いを更に深めていく。

知らぬところで“女帝”になっていたんですねえ、小池百合子女史は。取り巻きの役人を従えて。



そう言えば」と思える節が、小池百合子氏と蓮舫、石丸伸二、田母神俊雄の各氏で行われた候補者テレビ討論会の一場面にありましたね。蓮舫さんが「私は神宮外苑の再開発の動きを差し止めます。」と述べたのに対して、小池百合子女史はひどく冷厳な顔立ちをして、とりつくしまもなく、「あれを差し止めることはできません。すでに差し止めているからです。」と冷たく言い放っていました。右の写真のような、“女帝っぽさ”を精一杯押し殺したような表情でしたよ。



(Part 2) 今こそ保革逆転に踏み出すべき時

その一方で、街頭演説となると、ニュースキャスター時代から持ち合わせている柔和な表情で、穏やかで、親しみやすいイメージを演出しているのですから、女帝ぶりをまったくご存知でない都民の皆さんには大受けだったようです。一方、蓮舫さんの方は、ニュースキャスター時代から持ち合わせている爽やかさを存分に感じさせてくれたのですが、都民の皆さんの間ではおおむね、「ほら、むかし政権を握った民主党が事業仕分けを行った時に『スーパーコンピューターの開発目標は世界一位でなくてはならないのですか。』なんて“幼稚っぽい質問”をした人よ。」と噂されるだけだったのではないのでしょうか。

しかし、蓮舫さんが発した『スーパーコンピューターの開発目標は世界一位でなくてはならないのですか。』という質問は、決して“幼稚っぽい質問”ではなくて本物の「改革」の糸口になりえるものでした。日本の官公庁は、縦割りの問題に対して解を与える「部分最適」を打ち出す業にはたけていますが、「部分最適」を積み上げても「全的最適」が得られるものではありません。現に、スーパーコンピューターが世界一流になるということは、これを管轄する文部科学省所轄の独立行政法人理化学研究所にとっての「部分最適」

であったのですが、日本のIT産業にとっての「全的最適」の必須条件になっていなかったではありませんか。

日本の行政機関は軒並み古めかしい産業別縦割りの組織形態をとっており、国政の場合はそれぞれの事務次官を頂上に擁するピラミッド型組織の各省庁の意識は「今期並みの予算を確保すること」と、そのために「今期の予算を使い切ること」に集中しています。市民の生活には複合的な問題解決を要する事案が増えてきているのですが、予算縦割りの組織形態では、「全的最適」を実現できないのです。当時の民主党の幹部が蓮舫さんの“幼稚っぽい質問”をベースに、関係部門の役人を常駐させた横断的な組織を設け、更には、縦断的組織とのマトリックス組織を設けるといった“本物の改革”を目指した政策を打ち出せばよかったものを、無策で過ごしたばかりに民主党政権は短命で終わってしまいました。

お陰で蓮舫さんは“幼稚っぽい質問”をした人”というイメージを持ったまま都知事選に出馬しなくてはならなくなったわけですね。確かに国会では派閥をめぐる「政治と金」の問題が露見して自民党が窮地に追い込まれましたが、これはいわば自民党の自滅に過ぎず、立憲民主党をはじめとする野党が与党に対して行った政治活動の上で勝利したものではないのです。それにもかかわらず、国会の派閥問題の場での“圧倒的な優位”だけ考えて”我勝てり”と見て、なんの都政改革案も授けることなく蓮舫さんを都知事戦に送り出した立憲民主党幹部の何たる間の抜けた政治姿勢。いったい何を考えていたんでしょうね。

立憲民主党幹部殿は、いったんは自党から離れる形で都政に送り込んだ蓮舫さんにジャンヌ・ダルクのような活躍ができるとでも思っていたのでしょうか。ジャンヌ・ダルクが“民衆を導く自由の女神”と称えられるようになったのは、革新的な軍事指導者として活動できるだけの自己啓発と実践がなされていたからこそなんです。立憲民主党幹部諸氏が、蓮舫さんもまじえて、都政ひいては国政の革新策を議論した様子がまるでありません。都知事選挙でも第2位得票者になった石丸伸二氏の得票数が165万8363票、第3位の蓮舫さんの128万3262票と合わせると小池百合子女史の291万8015票を上回っており、都知事選挙と同日に行われた都議会議員補欠選挙でも自民党は2勝6敗の惨敗を喫しています。まさに保革逆転の絶好の機会だったというのに。

時を移して今や、一方における自民党の岸田首相の後釜決めと軌を一にするかのように、立憲民主党における次期代表選びの話題が賑やかに報道されるようになってきました。しかし、立憲民主党をはじめどの野党筋からも保革逆転を狙おうという構想が聞こえてきません。日本は2世3世の世襲議員が多い国です。歴代の総理を見てみても、橋本龍太郎氏以降の自民党総裁で総理大臣になった人で世襲議員でなかったのは菅義偉氏一人しかいません。祖父または父親がなっていた国会議員の座を“家業”として受け継いで“ジバン(地盤)、カンバン(看板)、カバン(鞆)”の三バンを守ってきた人たちが、これも派閥の取り仕切り役に祭り上げられている諸派閥会長間のたらい回しによって総理大臣になってきたのですから、「民主主義(国民が政治を運営することを重視する政治思想)」なんて感覚が少しも伝わってこないのも無理はありません。

自民党総裁選挙に2世3世の世襲議員が乗り込んできて物知り顔で議論しています。小泉進次郎氏などは、2世議員で総理大臣にまで昇りつめた小泉純一郎氏の後を引き継ぐ形で政界に現れたのですが、

「郵政の民営化が改革の本丸」などと全く訳のわからない「カイカク論」を口ずさんでいた親父殿の口調まで引き継いだ形で「私が総理になったらカイカクを推進します」と心地よげに述べていますね。しかし、これまでずっと長く続いてきた「政治とカネ」まみれの自民党の運営にどうしてこれまでに改革の口火を入らずに来たのでしょうかねえ。せめて、親父殿が口ずさんでいながら実行するには至れなかった「自民党をぶっ壊す」ことでも実行できたのなら「これぞ改革なり」と賞賛することができそうなのですが。

そう言えば自民党は、「政治”刷新”本部」なんてものを立ち上げて、(1)派閥の解消、(2)政治資金の透明化、(3)派閥の政治資金と人事への関与の見直しを行い”刷新”を果たしたとして誇らしげな表情をしていますね。しかし、「刷新」とは「悪い部分を全部取り除いて、事態を新しいものにすること」ですよ。(1)「派閥」の名前はなんやら「政策集団」の名に変わるのでしょうか、(2)「政治資金の透明化」ってどこがどう透明化されるのでしょうかね。そのうえ、政治資金の取り扱いのお粗末さが露見して廃業した代議士の数はほんのわずかで、(3)「派閥の政治資金と人事への関与」のリーダー役を果たしてきた派閥のご歴々は辞職どころか「政策集団」の幹部としてとどまるのでしょうかから、「悪い部分を全部取り除いている」ようにはとても思えません。

しかし、首相と野党が直接対決する党首討論で、「これでは国民の信義が得られないのではないかと迫った立憲民主党の泉健太代表に対して、岸田自民党総裁は「とにかく政治にはおカネがかかるんです」という論法を繰り返すだけでしたね。そして、泉代表が「それじゃ、内閣不信任案を提示します」と切り出しても平気の平左。案の定、内閣不信任案は軽く否決されてしまいましたね。今後とも、立憲民主党がどんな改善案を打ち出したとしても、国会の信任を得ることがないでしょう。反自民党勢の大同団結による保革逆転の実現こそが真の政界刷新の第一歩だということが歴然としていると思います。

明日(9/23)決まるという立憲民主党の新代表殿には、アンチ自民党勢を合同した新政党「政治刷新党」を立ち上げるところにしか活路を見出すことができないのではないかと思います。在来の野党議員ばかりでなく、信用度が激落して居心地が悪くなった自民党議員でさえ、喜んで日本の国民のための国政を標榜する新政党「政治刷新党」への参加を標榜してくることでしょう。自民党とともに与党の一員となってきた公明党の議員やそれを支援してきた創価学会信者の皆さんにとっても、自民党と決別し新政党「政治刷新党」への参加に踏み切る格好の潮時となると思います。そしてまずは党勢拡大を得て、世襲議員蔓延の根源となってきた小選挙区制を改めて、国会議員選挙にふさわしい全国区選挙に代えるべく選挙法の改定に当面の全力を傾注するのです。

新政党「政治刷新党」の大同は保革逆転にあり、小異は様々あってもかまわないと思います。更に大同をもって市民運動を立ち上げ、60年も前の安保闘争以来すっかり下火になってしまった学生運動と労働運動に成り代わった市民との相互啓発の機会を設けてほしいと思っています。東京都知事選でも石丸伸二氏が「インターネットを大いに活用した“SNS 戦略”に効果があった」と述べています。SNS を用いた市民との意思疎通の機会を持つことが党勢拡大にもつながり、政党活動を一層活性化させるものと思います。高齢者の私でも、市民集会が開かれたら真っ先に参加して、日本国の将来に関する議論にともに参加したいと思っています。

(Part 3) 「国権の最高機関」らしい国会に

日本国憲法においては、国会は「国権の最高機関」であって、「国の唯一の立法機関」と位置づけられています。しかし、立法機関とされていながら、国会議員が法案を提出する議員立法の数はごく限られており、内閣が提出する法案による立法が大半を占めています。内閣は日本の行政府ですが、「首長たる内閣総理大臣およびその他の国务大臣で組織される合議制の機関」ですから、国会議員である国务大臣が法案を提出したとしても国会の「国の唯一の立法機関」としての形は揺るぐところがないのですが、現実には担当の官公庁の提案がそのまま罷り通ってしまうところに問題があります。国会の法案審議の場面で回答に窮した大臣が、担当官僚から手渡されたメモを用いて答弁に当たっている姿からは、どう見ても「国会は国の唯一の立法機関」というイメージが湧いてくるものではありません。

その昔、子どもの将来を期待して語られた「末は博士か大臣か」という言葉が政界には根強く残っていて、「与党に在籍していればそのうちに大臣になって箔をつけることができる」というのが国会議員の自民党在籍志望となっているのではないかと思います。現在も国务大臣を経験して箔をつけた代議士が自民党の総裁選挙に名乗りを上げています。しかし、いずれの政権演説を聴いても取りどころがなく、大臣経験がなんの役に立ったのかわからない人たちはです。我々が新政党「政治刷新党」が与党になったとしても、箔付け志願者が続出したのでは自民党政権の“お役人依存似非立法体制”が繰り返されるばかりです。なんとしても、党勢拡大努力と併せて“お役人駆使形立法体制”構築を編み出さなくては。

日本の行政機関は軒並み古めかしい産業別縦割りの組織形態をとっており、国政の場合はそれぞれの事務次官を頂上に擁するピラミッド型組織になっています。市民の生活には複合的で横断的な問題解決を要する事案が増えてきているのですが、予算縦割りの組織形態では、「全的最適」を実現できないのです。さしずめデジタル処理問題は各官公庁にかかわりのある横断的な問題ですから、各省庁のデジタル処理担当官僚を常駐させた横断的な組織を編成するのかと思いきや、「全的最善」の追及には全く役に立たない、官僚の新規雇用による従来と同様な縦割り組織のデータ庁を編成したので失望しました。

少子化問題も然りの複合的な問題なのですが、自民党政権が人気取りのために少子化問題担当大臣を配置するだけで、これを下支えする官公庁組織をつくらずに来たために、労働市場に新規就労者数が不足するという現象が顕在化するという事態を招来することになってしまいました。少子化問題に関連した諸官庁の官僚を駐在させた複合的な少子化対策庁を編成しておけば、労働市場や学校教育面における問題の生成は早々に予測できていたはずですが。保革逆転を成就した後の我々が新政党「政治刷新党」の課題は、複合的な問題に対処できる横断的な官僚組織の導入にあると思います。

もともと、在来の縦割り官公庁組織では、諸情報がピラミッド組織のトップに立って管理する“事務次官”に集中しているのですから、専門的な問題についての「部分最適」の問題解決はお手の物です。ですから、議員大臣がトップとしてここに配されたとしても屋上屋を重ねた形になるだけで「議院内閣制」の実を上げる上で少しも役に立つものではありません。“事務次官”などという妙に謙遜した名称を用いずに“長官”としてトップに立って“個別最適”を目指した問題解決を推進すればよいのです。少子化対策担当

をはじめとした「内閣府特命担当大臣」もほとんど実効力がなく、単なるお飾りで、議員が大臣経験によって“箔をつける”ために利用されているだけで内閣の問題解決寮に寄与するところがありません。

自民党総裁選挙に乗り出してきている小林鷹之氏が内閣府特命担当大臣として担当していた経済安全保障担当の仕事も、経済企画庁、通商産業省、防衛庁、国土交通省、それに財務省等の官僚が兼務の形で常駐する横断的組織の「経済安全保障省」でも配置して、それぞれの個別最適を昇華した全体最適を案出する必要があったのではないかと思います。そして、この「経済安全保障省」の各官僚間の協議を促し全体最適の導出するところにこそ議員大臣の出番があり、議院内閣制の真骨頂があるのではないかと思います。「内閣」とは言っても、行政執行力の持ち主は官僚です。縦断的な問題は、当該の問題に関する情報収集・処理に優れた担当官庁に依存した“お役人依存体制”で済ませることができましたが、これだけでは全的最適が得られず、日本国民は不安にさらされていたままで、無駄な行政支出のために過大な租税を納入させられることになってしまいます。

岸田首相は渡米に当たって、長年米国の意を受けて自国の軍事能力拡大に努めてきた日本の貢献が感謝されて国賓待遇を受けてご満悦の意を表していましたね。日本の官僚はは、国家試験を受けてそれぞれの省庁に入省して以来互いに切磋琢磨して高いピラミッド組織を昇りつめてきた優秀な素材が揃っています。「経済安全保障省」で議論するとなったら、防衛庁以外の官僚は、岸田首相をはじめとする政治家のように、「ロシアのウクライナ侵攻に伴って極東に安全保障上の緊張が走った」という米国のプロパガンダに盲従したりすることなく、不戦を誓った平和憲法を擁する日本ならではの国際平和促進策の方に舵取りを進めることでしょう。米国の属国みたいな立場を離れて、平和の使途として世界各国国民から信頼される道も開けてくるものと楽しみにしています。

民間企業ではとうに実践しているプロジェクトチーム体制でも良いのです。大臣または大臣の補佐役として、関係諸官公庁の官僚が常駐するプロジェクトチームに合流して解決策を求めて、国民の視点に合致した全的最適を導出できる形にしたなら、形は内閣立法の形であったとしても、よほど議員立法の姿に近いものとなると思います。またこうして議員が体験した立法体験が、党内研究会等の相互啓発の機会を通じて普及すれば、議員立法件数も拡大していくものと思われれます。いずれにしても、ずっと似非立法機関に過ぎない姿でとおでてきた国会が、保革逆転に次ぐ横断的官僚制度の採用という本物の改革によって、憲法に記された通りの「国権の最高機関」らしくなを見届け、日本国民としての喜びに浸りたいと願っています。

以上